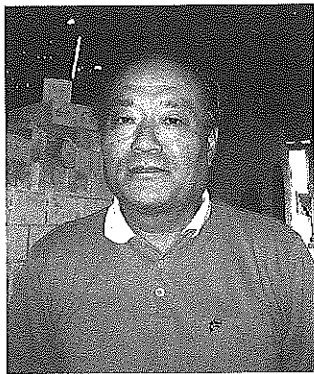


木にまつわる
技術・伝統inいわて

平成23年6月23日、県民会館で開催された岩手県林業改良普及協会通常総会において、「木にまつわる伝統技術・伝統文化を今に伝える人々」を発掘、その情報を本誌で発信することにより、地域に眠る技術・文化の見直しを図る。」ことが決議されました。

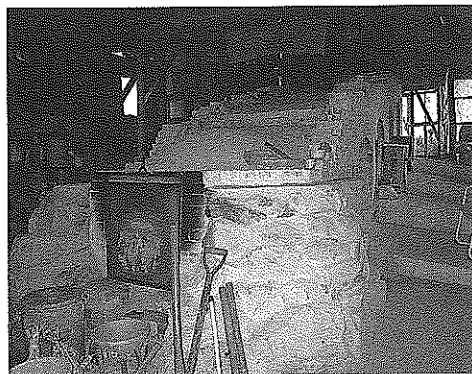
そこで第1回として、岩泉町で県の本であるアカマツを使って陶芸を行っている 分田 真（ぶん でん まこと）さんを紹介いたします。



分田 真さん

分田さんは、北海道生まれ、横浜国立大学を卒業、佐賀県窯業試験場、有田窯業大学校で学ばれた後、有田焼や唐津焼の窯元で修業をされました。独立を考えていた頃、岩泉町に

原料の粘土と燃料であるアカマツが豊富にあることを知り、何度も通った末、平成2年に龍泉洞の近くに登り窯を築造し、「亜久亜工房 森水窯」と銘名しました。



登り窯

窯の近傍から掘り出した粘土を精製し、岩泉産の耐火粘土を混合した原料と、南部アカマツを燃料として、自作の登り窯で3日間かけて焼成しているそうです。登り窯の燃料としてアカマツが優れているところは、
① 温度が上がる。② 火足が長い
ため、広く熱くすることができ、
③ 火力をコントロールしやすい。
とのことで、同じく登り窯で焼いている方にはたいへん羨ましがられているそうです。

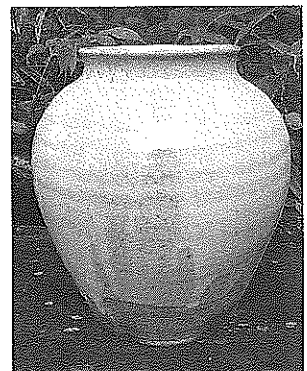


薪になるアカマツ材

特に、岩泉町では、工事の支障木や雪害木、マツタケのためにアカマツ林を手入れた森林所有者などから、アカマツ材が持ち込まれたり、持っていつて欲しいと提供を受けたり、ほぼ、無料で燃料が調達でき、普通であれば、1窯30万円ほど薪代が掛かるとのことですので、これはたしかに羨望の的と思われまます。

「登り窯の燃料として優れているアカマツは、欲しいと思う窯元がきつとあると思う。薪としてうまく出荷できれば、地域林業振興の一助になるのでは。」とお話でした。

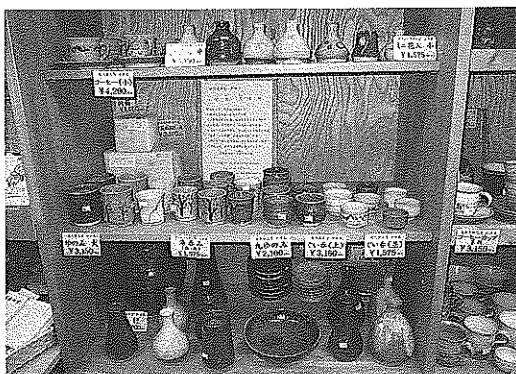
「森水窯」は、文字通り「森と水のシンフォニー」の岩泉町にあやかっで付けた窯名。「亜久亜工房」の「あくあ」はアイヌ語の「水」の意味からの銘名だそうです。



作品の大壺

分田さんの作品は、「岩泉焼」の名前で、岩泉町内の道の駅「いわいずみ」や「三田貝分校」などで求めることができます。

土が持つ存在感を表現すべく、日夜努力されているとのことですので、ぜひ一度手に取ってご覧ください。



道の駅いわいずみ「岩泉焼コーナー」

林業技術センター普及班
019(698)1337